
豆姫はチョコを一刀両断

獄兎口ク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆姫はチヨコを一刀両断

【Nコード】

N3829K

【作者名】

獄兔口ク

【あらすじ】

「お嬢様の恩人には、地獄の底ならぬ地獄のソコまでついていきます。血の池の手前まで、見送り気分です」

憑物神、九十九神——日本古来より生きる、物を司る神達。

万条目財団の万条目 金澱とその仲間が生き残りをかけて挑む相手は……？

連載というより長編の製作過程を乗せるような気分で行こうと思ってます。

「サントクロースが追ってきます」(前書き)

物語の「起」の部分。流し読み推奨。

「サントクロースが追ってきます」

溜息をつきながら、川べりを少年が歩いていた。某高校指定のズボンとYシャツをやや崩して着た、黒髪の少年である。

色白の肌にややたれ気味の目、整った顔立ち。みる者に優しげで快活そうな印象を与える顔つきだ。

しかし今はいかにも不機嫌といった表情を浮かべている。

ここ凧川は花見の名所として有名である。景観を重視して整備された土手の両岸には百二十余りの桜が植えられ、毎年それらが咲き誇る頃ともなればブルーシートを使った陣取り合戦が繰り広げられる程の人入りがある。

しかし葉桜さえ散ったこの時期、人は全くとっていいほどない。そしてこの人気の無さが、少年が凧川へ足を運んだ理由である。とてつもなく大きな問題があるというのに、まるでどうすればいいのか分からない。手の出しようも無い。とりあえず一人静かな場所で落ち着いて考えをめぐらしたい——そう思い手近な川まで来た彼だが、落ち着くどころか焦るばかりであった。そんな彼に声をかけるジョギングにいそしむ人もいたのだが、彼は無視した。

蟬の死骸を蹴り転がしながら歩くうち、急に少年の視界が開けた。海だ。

悶々と考えを巡らせて歩くうち、ついに川が海へ流れ込む河口にまで来てしまったのだ。

そこはこれまでであるいてきた川岸とは違い堤防から釣り糸を垂らす釣り人やウインドサーファーでこった返していたが、少年は気にならなかった。広い海を前にしてどうでもよくなった。

よしじゃあこんな物も捨てちまえ、と背負っていたカバンを外す。「どーにでも、なりやがれ！」

投げつけるのも決まった。海のはるか先へと伸びる橋の影へ入り、そのまま自分自身も海に放り込みそんな勢いをつけ、数十m先の湾

岸道路の柱めがけ重荷を放り投げようとした、その時だった。

「キヤアアアアアア！」

頭上から響く悲鳴。声に反応し少年は橋を見上げる。そして眼窩から脊髄へと駆け抜ける衝撃と閃き。

少年の目には、橋から飛び出し落下する少女が救いの天使に映った。

頭からコンクリートの地面へ落ちてゆく少女の名は万条目 金瀬。万条目グループの令嬢である。

少年が少女の存在を知ったのはほんの数週間前のことである。彼が会場設営のアルバイトをした万条目グループ関連企業のイベントで、万条目グループの代表として出席していた彼女を目にしていたのだ。自分とほぼ同年齢でありながらグループ代表の名を背負って堂々と立ち振る舞う少女の姿は、少年の脳に鮮明に焼き付いていた。そしてその令嬢が落下しているということ——金を持った人間が危機に直面しているこの状況が、少年には絶大なチャンスに思えた。自暴自棄から一瞬で冷静になった彼は本来の計算高さを取り戻す。カバンを思い切り投げ捨てようとする彼と少女の落下予想地点は十m以上。海に向かって勢いをつけている事も合わせて考えると、人間の身体能力ではとても少女を助け、恩人として取り回すことは叶わない。

人間ならば。

彼の脳が計算を始める。どうすれば劇的に、かつ自然に少女を救えるかを求める計算だ。答えが出た。

まず邪魔なカバンを手放し、地面を蹴って方向転換。この時点で彼に注目する人はいない。落下する少女に注意を完全に奪われている。

次に少年はもう一度地面を思い切り蹴り、加速した。人間を遥かに超えた脚力で一気に運動エネルギーを得、人目を集めることなく最高速度に乗った。

そのまま大股でコンクリートを6・7回蹴り、落下寸前の少女を

射程距離に捕える。そこではじめて人目が少年にも集まる。

野球の頭から入るスライディングのようにとんで両手を伸ばし、バレーボールのレシーブのように両掌をあわせ少女の小さな頭と地面の間にさし入れる。手に暖かな感触を感じると同時に、腕を縮め少女の頭を自分の方へ引き寄せる。

周囲の視線が少女と地面の間に完全に集中したその瞬間、自分の頭をわざと下げ腕の間にすべりこませた。

結果として少年が頭から思い切りコンクリートの岸にすべりこみ、その少年の背中をクツションに少女が着地する形になった。

「大丈夫！？ 怪我はない？」

あえて受け身を取らなかったことで、左半身の顔から太腿まで擦りむいた自身をかえりみず少女を心配する少年。既に起き上がり、腕の中に少女を抱えていた。彼女は柔らかな前髪ごしに少年を見つめ、弱々しく言った。

「助けて、下さい。サンタクロースが……追ってきます……」

そして腕の中で意識を失った。

秘書——楓（前書き）

これも同じく流し読み推奨。設定が大体分かってもらえればオッケ
ー、なかんじです

同日の夕方。絨毯の敷き詰められた部屋の厚いドアが開いた。入ってきたのはスーツ姿の少女。手にした盆には紅茶のカップが二つ乗っている。カップをテーブルに置き、先に座っていた少年と向き合うように座る。

「この度はお嬢様の命を救って頂き誠にありがとうございました。お嬢様の言葉に加え一使用人として私からもお礼申し上げます」

上下とも黒い、下がズボンのレディーススーツに身を包む少女が頭を下げた。

その格好は彼女の秘書官としての正装であり、飾り気など全くない。しかしそのことが、むしろ彼女のクールビューティーと形容されるシヤープな魅力を引き立てる。

「どういたしました。あの女の子が無事ならよかったよ」

やや照れくさそうな表情で答えるのは左半身を包帯で包んだ少年——朝方に少女万条目金澱を助けたあの少年である。

あのあとすぐさま駆け付けたのがこのスーツの少女だ。

秘書を名乗る彼女によって怪我を負った二人はすぐさま病院へ運ばれた。診断の結果は半身の打ち身と擦り傷を負った少年に比べて万条目少女は足の骨にひびが入っただけというもの。そのことでスーツの少女が雇い主に代わって是非お礼が言いたい、と言い少年を万条目家へ招待した。

かくして少年は万条目家の敷居をまたぐこととなった。

「そういえば今どこに居るの、あの子は？ さっき何やら気になることを言っていたけれど。サンタクロースがどうか」

「お嬢様は今現在隣の部屋でお休みにいられています。直接会って話されたいですね、先ほど直接お礼を言いに来ると仰られています。分かりました。少々お待ち下さい」

淡々とした口調でそう告げ秘書は立ち上がり部屋から出て行き、

すぐに戻ってきた。

「お嬢様は間もなくもうすぐこの部屋へといらっしゃいます。またお嬢様は命の恩人である貴方の名前がお知りになりたいと。もしよろしければ貴方のお名前をお聞かせ願えますか？」

秘書官の目が細くなる。

「名前が知りたいって？ 勿論いいよ。僕は……諏訪。そう、諏訪哲也^{てつや}。よろしく。ええと——そうだ、君の名前は？ お互い自己紹介ってことで聞きたいけどいいかな？」

少女の鋭い瞳は、諏訪と名乗る少年が視線を泳がせたことを見逃さなかった。

「失礼。自己紹介がまだでした。諏訪様が名前を知られたところになにも意味がないようなただの一介の秘書官ですが名乗らせて頂きます。私の名は田中^{たなか} 楓^{かえで}。何卒よろしく願います。」

さて何度も席をはずすことになりあわただしくて申し訳ないのですがお嬢様は一刻一秒も諏訪様の名前をお知りになりたいとのことでしたので報告してまいります。もう少々々お待ち下さい」

そう言々と楓はまたドアの向こうへと消え、車イスを押して戻ってきた。

イスに座る、線の細い少女。か弱そうな足に巻かれた包帯が痛々しい。だがそれでいて気品を漂わせる彼女は、凜と咲く花を思わせる。

「さつきはありがとうございます、諏訪さん。あ、ごめんなさい先に諏訪さんだけ名乗らせてしまつて。私^{まんじようめ}万条目^{かなあり} 金澱^{きんせき}つていいます。よろしくおねがいしますね！」

そういつてぺこりと頭を下げる金澱につられて、哲也も頭を下げる。

「もしよろしければ、諏訪さんには是非お礼をさせて下さい。万条目グループの一員として、私出来ることなら何でもします」

「万条目グループ？」

そんな二人のあいだに、哲也が疑問の表情で割って入る。

「はい、あまり世間に名の知れていないグループですけど、私はその後継ぎなんです。ですから遠慮することなくなんでも言って下さいね」

「なんでも遠慮せず、ねえ。急にそう言われると……」

「あ、ひよつとしてお金を使ってお礼をしたらうのが嫌なんですか？　そうですよね、お金が欲しくて助けてくれた訳じゃないのに、ごめんなさい……」

大きな瞳に涙を浮かばせる金澱。

「いや、お金でお礼をしたらうのが嫌な訳じゃないよ。ただいきなりのことだったからちよつと驚いちゃってさ。」

自分から切り込むべく機会をうかがっていた哲也は表情にこそ出さないが戸惑った。こんなに思うように話が進んでしまっているのか。

が、願ってもない好機だと開き直る。

「一応いま結構困っていることだっただってあるんだけど、助けたぐらいでお願いするのもどうかナーって思ってるし」

哲也の弱々しい言葉を遮るように車イスから金澱が身を乗り出す。

「勿論お願いしていいです！　さあ、お困りごとは何ですか？」

興奮気味の主の隣に立つ楓は主人に意見する気は無いらしく無表情を通している。

「困ってるコトってというのは……その……帰る所が無いんだ」

「帰る家がないというのはつまり諏訪様が家出中ということでしょうか？」

楓の言葉を諏訪は力なく首を振って否定する。

「家出だったら僕もそう苦労しないけどね、一家離散だよ。だからよければ僕をしばらくここに置いてもらえない？」

「はい、もちろんいいですよ」

「え？　本当に！？」

「諏訪さんは命の恩人ですもの。だから、そんなに頭を下げることはないですよ」

大輪のヒマワリのような笑顔。頭を上げた哲也には、それが彼の心の底まで差し込むほどに眩しかった。

（本当によろしいのですかお嬢様？）

楓が哲也に聞こえないよう小さな声と視線で確認をとる。金澱は口元に哲也に向けたものとは別の笑みを浮かべ、確かに頷いてみせた。

「でもその前に一つだけ話しておかなければならないことがあるんです、諏訪さん。覚えてますか、助けてもらった時に私が言ったことを」

「覚えてるよ、確か“サンタクロースに追われています”って言うてたよね。サンタクロースってあのサンタクロースのこと？」

表情を少し苦々しいものに変えて、金澱はええと頷く。楓は主人の滅多に見せないそんな表情に不吉なものを感じ取り、一步下がる。そのときも客人の前で顔色を変えなかったあたりは一流秘書といふべきだろう。

そんな二人の様子を知ってか知らずか、哲也はただ好奇心で、という風に赤服おじさんが二人を追いかける理由を尋ねた。

「それは……私が、いえ私たちが“ツクモガミ”だからですよ」「ツクモガミ？」

「ええ、ツクモガミ——付喪神。九十九の物に宿る神。諏訪さんは、長く使われた物には魂が宿る、なんてきいたことはないですか？

突拍子もない話ですけど、信じて下さい」

「そりゃ信じるけどさ……」

あつさり付喪神という、超常的でオカルトチックな話を信じ、頷く哲也。

「だって、お金持ちのお嬢様が湾岸道路から降ってきた後だからさ。今ならどんな話だって信じるよ。例え悪魔だろうと宇宙人だろうと妖怪だろうと……」

「そう、妖怪。付喪神は妖怪のようなものだと思って下さい。人間が妖怪って呼ぶ存在は、実は全部付喪神なんです。楓と私も、人間

が作った妖怪図鑑に載ってるんですよ」

成程妖怪か、と哲也が顎を引いて理解を示す。

「で、なんで付喪神だとサンタクロースに追われることになるの？」
金澱が秘書に新しい紅茶を持ってくるよう言いつけてからそれに答える。

「それはサンタクロースも付喪神だからなんです。付喪神の一族は、物や行事に対する感謝や尊敬の気持ちが固まって生まれました。そして人がその物や行事に懸ける思いから付喪神が力を得て、その物や行事を繁栄させ、より多くの人の思いを集めて更に強くなる。こうやって日本古来からの伝統文化は進化しながら受け継がれてきたんです」

でも、とそこで言葉を一旦区切り楓が運んできた紅茶に口を付ける。

「新しく生まれた外国文化の付喪神たち、あの人たちは私たち日本古来の付く喪神を全滅させて、私達日本の付喪神の集めていた思いを奪い取るうとしてっているんです。そして外国の付喪神のトップに立つのが……」

「サンタクロースなんだね？」

重々しく引かれた顎が、肯定を示した。

「でも、今朝の戦闘で、目下の敵が変わってしまいました。私達が今倒すべきはクリスマスでなくバレンタインデーなんです」

「バレンタインデーが今の敵！？ どういうこと？」

「それは私も聞いていません。お嬢様、一体全体今朝何があったのでしょうか」

新たにもたらされた情報に、沈黙を守っていた楓も反応する。

「私は今朝、相手の戦力を落とす為にクリスマスの付喪神たちの本部の一つに乗り込んできました。でもそこにいたのはクリスマスの下っ端付喪神だけじゃなくて、バレンタインの付喪神もいたんです」
「クリスマスの付喪神サンタクロース達がバレンタインデーの付喪神達に協力を求めたということでしょうか？ もしもそうならば非

常に危機迫る状況かと思われませんが」

「残念ながら、そうみたいです。クリスマスの付喪神の一人がこんなことを言っていたんです。」

（俺達サンタクロースの本家の方々は、既に今年のクリスマスをかつてないほど盛大なものにするべく準備を始めてらっしゃる。お前達二人の相手はバレンタインのあの三人と俺達分家のサンタがしてやる）

と。恐らく今年のクリスマスで力を蓄え、時間を与えず——あわよくば年が開ける前にあの人を仕留めるつもりなのでしょうね。もしあの人が負ければ、次は私達を全力で……殺そうとするでしょう」

「ではこれから、特に最も重要で熾烈な抗争が繰り広げられると予想されるクリスマスから年末までの間、あの方に助太刀しますか？」

「……いえ」

楓の提案を、鋭く首を振って却下する。

「私たちはあの三人——バレンタインとの戦いに集中しましょう？確かにあの人倒されてしまえばお終いですけど、私達には助けに行く余裕なんてないです。そもそも、あの方は助太刀なんてさせてくれないでしょうから。大丈夫、あの方はそんなに簡単に負けたりしません」

「真に良き判断かと」

自身の命どころか、種全体の存続さえ危機にさらされているこの状況。しかしそんな重圧の中にもありながらも動揺することなく、迷うことなく、判断を下す。毅然とした肖像がどこか練達の將軍を思わせる金澱。彼女の言葉が、秘書であり親友であり命運を共にする楓にとって他の何より重い。

「これで哲也さんにも私と楓の事情はわかってもらえたと思います。哲也さんにも、お手伝いしてもらったことがあるかもしれないから知っておいて欲しかったんです。大丈夫、危ないことはさせませんから。」

ところで、バレンタインデーがどんな行事かはもちろん知っています

すよね？ 敵のことを知らないと戦争はできないですよ？」

金澱は歴戦の老将から可憐な少女へと表情を変えて、哲也の方に振り向く。空にふわりと取り残された髪の本一本が、落日の赤光を浴びて煌めいた。

「そりゃ勿論知ってるさ」

得意げな表情をみせて胸をそらす少年。

「僕の記憶に狂いが必要——そんなものあるはずもないけどね——バレンタインデーは“お菓子をくれなきゃ悪戯しちゃうぞー”って言いながら女の子を追い回すお祭りのことだったはずだ」

「今すぐお医者さんに行って下さい！ あまりに記憶が狂いすぎです——！」

声を荒げた金澱が立ち上がって間違いを訴える。

「あれ？ そんなはずは——“お菓子をくれなきゃ犯しちゃうぞ”だったっけか？」

「もつとちがいます！ そんな文化の学校ならあるかもしれませんけど、絶対に全国では通用しないですそんな、そんな——」

頬を朱に染めて片方の手で少年を指し、もう一方の手で頭を押さえる。

「お嬢様、もう少し冷静に突っ込みを入れないと倒れてしまいます。ところで諏訪様、念のため聞かせて頂きますが節分とはどういった行事でしょうか？ まさか日本人でありながらこれを知らないという訳じゃないでしょうね？」

「節分？ それぐらい誰でも知ってることだよ」

楓の挑戦的な鋭い視線を受けて、余裕で返す哲也。

「節分は“鬼は外、服は家”って叫びながら干していた服を取りこんで、鬼から守る行事でしょ？」

「違います！ ああ、折角頼りになりそうな人が来てくれたと思っただのに。私、なんだか頭が……。楓、哲也さんをもう一度病院へ連れて行って下さい。私は少し休みま……」

「お嬢様！？」

頭を押さえていた金瀬が揺らぎ、絨毯の上に倒れた。

クイズ（前書き）

特に言うことは無し

そろそろここから加速するかもって感じですよ。

クイズ

万条目家の屋敷の応接間には、再び静寂の帳が降りていた。

テーブルで黙々と本のページをめくる少女秘書楓。その脇には置かれたノートパソコン。向かい合うように座る哲也少年。

秘書が倒れた主人を寝室へ運んでからもう十分が経過しようとしている。にも関わらず、どちらも自分から話しかけることは無い。二人の間には、ページをめくる音だけがある。

そのまま三時間が経過した。

「ねえ田中ちゃん……」

“ちゃん”と呼ばないでください」

楓がぴしゃりと言う。哲也が少し傷ついたような顔になって言い直す。

「あ、ごめん。田中さん。さっき万条目ちゃんが倒れたのって、ひよつとして僕のせい？」

三時間と十分をかけて、ついに哲也が答えにたどり着く。

楓が手にしていた本をしおりも挟まずパタンと閉じた。

「ひよつとしようがひよつとしまいがひよつとしなかつたがお嬢様が倒れたのは余すことなく一片残らず貴方の責任です。お嬢様が常識知らずにも程があると仰っておられました。お嬢様を呆れさせる輩は諏訪様——いえこれからは諏訪さんと呼ばせて頂きましょうか

——お嬢様を呆れさせたのは諏訪さんで二人目です。

そう言えばお嬢様が病院にもう一度連れて行くようにと仰っていましたね。今すぐ医者に手術の手配をしましょう。貴方を治すにはダイナマイトを使った脳手術がいいでしょうね」

「いや、治るところかそれ僕死んじゃうよ？」

“馬鹿は殺して治せ”と言うでしょう。ニトログリセリンのお世

話になりたくないのなら常識知らずを披露するのを謹んで下さい。それとも実はあれはわざとだったのでしょうか？」

キツイ言葉を受けて哲也は悄然とうなだれる。

「解ったよ。後で万条目ちゃんにも謝っておく。あ、でもわざとじゃないよ？ 万条目ちゃんがいなかったら、僕は今頃公園でダンボールに農薬を混ぜて作った肉まんを食べるはめになっていただろうからさ。怨むどころか凄く感謝してるよ」

「わざとでないのは解りました。突っ込むべきところはここでないと思いますが一応。農薬は肉まんではなくギョウザの件です」

「？ ということか分からないけど、わざとじゃないことを理解してもらえてよかったよ。それから君にも謝らないとね。……ゴメン」

「どういうことでしょう？ 私が謝られるようなことは何もないと思います」

神妙な顔つきで突然哲也が頭を下げた。高級テーブルの表面に額が乗る。

「だってほら、こんな広い屋敷でも女の子が知りあったばかりの男と一つ屋根の下で暮らさなきゃいけないなんて、凄く嫌でしょ。だから謝らなきゃいけないって。」

僕は出来るだけ早く、経済的にも社会的にも自立して出ていくことにするよ」

「成程そういうことでしたか。しかし心配には及びません。この程度苦でもありませんから。私はお嬢様に地獄の底まで付いていく覚悟ですし、お嬢様の命の恩人である諏訪様も地獄のソコまで——そうですね針山地獄の手前あたりまでは見送る所存です。」

「上手いコト言うもんだな、田中さんって国語が得意なんだね」
そういつて哲也は笑う。

表情に現れることはなかったが、楓は内心舌を巻きたい気分だった。

家族が離散したと言って同情心と恩に付け入って居候を要求する。

その上支離滅裂な発言で主を困らせる、そんな彼には敵意があるとおもっていた。それなのに、こうもあっさりと謝るとは完全に予想外だった。

もっともその思い込みには彼女が絶大な信頼をよせる根拠があり、哲也の行動が彼女の心を信頼で満たすことは無い。

「あ、そういうええ一つ聞きたいことがあるんだけど」

なんでしよう、と楓。

「さっきの話を聞くと人気のあるクリスマスやバレンタインデーの付喪神の方が、忘れられかけてる日本の文化よりずっと強いと思うんだけど、どうやって勝つつもりなの？」

「この屋敷が彼らに攻撃されない理由は後々話すとしましよう。私たちが彼らに勝つ方法。そうですね、このクイズの答えが分かりますか？」

“コンピューターの計算プログラムにおいて、いかなる引数が入力された時にも、最小限の計算で四則演算かける割る足す引く—— $\times \cdot \div \cdot + \cdot -$ の計算と数字の——だけをを使って百以上の返り値を出力するにはどのようなプログラムを作ればよいか？”

「なにそれ！？　すごく難しくない？」

哲也の額に深いしわが寄る。

背に陽炎ができそうなほど悶々と考え込む哲也の姿を、楓の感情の波紋の無い瞳が映していた。

待つこと数分。

「これってつまり、“1とかける、割る、足す、引くの記号を使って、どんな数を入れても最小限の計算で100より大きい答えが出てくる式を作れ”っていうことだよな？」

少年の数分間は、問題文を理解することに消費された。

「時間切れです。正解は“百以上の値になるまで計算し、答えが百になったら計算を切り上げるプログラム”です。プログラミングの初歩で言語という“for文”。最も良い計算の順番は割愛します」

「僕プログラミングなんてやったことないのに解る訳無いよ。田中

さんはパソコンとか扱えるクチ？」

「万条目グループホームページ管理は私の仕事です。出現は非常に極めてまれですが情報操作のためハンドルネームが必要な掲示板に出現する際には“筒井筒 ツツジ”を名乗ります。

で、実は先ほどのクイズとは関係がないのですが、“勝つまでやる”が私達に残された唯一の手段です。出会えば勝ち目のない強力な個体に見つかからないよう細心の注意を払いまた完全な逃走ルートを確保し、スキを衝いて相手の戦力を少しずつ削る。こうしてこれまでは曲がりなりにも闘うことが可能でした。しかし分家のサンタはともかくあの三人が出てきた今そんな卑怯で姑息な安全策が通じるとは思えません。彼らのうち一人とでも遭遇してしまえば逃走すら不可能でしょうから」

淡々と語られた現状は絶望へとつながっていた。

「さてそんな暗い話は綺麗さっぱり忘却し夕食を食べに行きましょう。もうそろそろ使用人が食事の用意を終えているでしょうから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3829k/>

豆姫はチョコを一刀両断

2010年10月9日14時32分発行